

現代日本語における連体修飾成分の意味と論理構造

The Meaning and Logic of noun modification in Japanese

劉 燕嵐

0 はじめに

現代日本語の修飾語には、連体修飾語と連用修飾語がある。体言を修飾する成分が連体修飾語である。連体修飾語には、「白い花」「大きな家」のような語が修飾するものと、「梅の花」「飛び回っている蝶」のような文節や連文節が修飾するものがある。

前者は「連体修飾語」と呼ばれ、後者は「連体修飾節」や「連体修飾句」や「関係節」などと呼ばれる。両者を合わせて、「連体修飾成分」と呼ぶこともある。また、修飾される成分を「底の名詞」や「主名詞」や「被修飾名詞句」などと呼ぶことがある。さらに、修飾する成分と修飾される成分とで、「連体修飾構造」を構成する。

本稿で、従来の研究に基づき、形式意味論の演繹的な分析方法を現代日本語の連体修飾成分の研究に応用し、現代日本語の連体修飾成分の意味と論理構造を考察してみたい。

1 現代日本語の連体修飾成分に関する先行研究

1.1 奥津敬一郎(1974)による研究

奥津敬一郎(1974)は現代日本語の連体修飾を「同一名詞連体修飾」と

「付加名詞連体修飾」の二種類に分けている。

「同一名詞連体修飾」を論じるために、奥津敬一郎（1974）はまず「名詞同一の条件」を提示している。即ち、「連体修飾構造の場合には、被修飾名詞と連体修飾文中の名詞とが同一でなければならない」。例えば、

(1) 昨日銀座でうなぎを食べた僕

(奥津敬一郎 1974 : 97)

この連体修飾構造は、「[僕が昨日銀座でうなぎを食べた][僕]」のように、連体修飾文中に被修飾名詞と同一の「僕」が含まれている。「名詞同一の条件」は「連体修飾文と被修飾名詞との関係を説明し、正しい連体修飾構造を作るための必要な条件である」。この条件による連体修飾を「同一名詞連体修飾」と呼んでいる。

また、「付加名詞連体修飾」について、奥津敬一郎（1974）は次の例を挙げながら説明している。

(2) 茶の湯の修行の厳しいことを始めて知った。

(奥津敬一郎 1974 : 180)

奥津敬一郎（1974）によると、この例の「こと」は、連体修飾文中のある名詞を文末に置いたものではなく、先行する叙述文全体を一つの事柄として捉え、それを「こと」によってまとめて名詞化したものである。つまり、叙述文という本来名詞的性格を持たないものを名詞化するために、外からはめ込まれた枠のようなものである。

このような被修飾名詞は連体修飾文中には現れず、いわばその外から新たに付加されるので、「付加連体名詞（または簡単に付加名詞）」と呼び、この種の連体修飾構造を「付加名詞連体修飾（または簡単に付加連体修飾）」と呼んでいる。

1.2 寺村秀夫（1975-1978）による研究

寺村秀夫（1975-1978）は日本語の連体修飾を考察するとき、連体修飾部と被修飾語との関係を「内の関係」と「外の関係」の二つに分けている。このような「内の関係」と「外の関係」は、それぞれ奥津敬一郎（1974）の「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」に相当している。

- (3) a. サンマを焼く 男
 b. サンマを焼く 匂い

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ^(注1)

これらの構文はいずれも連体修飾構造である。寺村秀夫(1975-1978)は、一重線部を「修飾部」、二重線部を「底の名詞」と呼ぶ。(3a)は「内の関係」の例であり、(3b)とは「外の関係」の例である。

(3a)は「男がサンマを焼く」のように、底の名詞である「男」を修飾部の内側に移し、「焼く」の主格補語となることが可能である。このように、「底の名詞は、修飾部の用言に対して補語と考えることのできるような関係を内在しているものだ、と。このような連体修飾部と底の名詞との関係を「内の関係」と呼んでいる。

他方、(3b)ではそのような操作をすることができない。このように、「修飾部と底の名詞は、一つの文の構成要素が修飾関係に転じたということができない、言い換えると、底の名詞は修飾部のどこかから取り出されて被修飾語の位置に坐ったものとは言えない」のような連体修飾の関係を「外の関係」と呼んでいる。

寺村秀夫（1975-1978）は「内の関係」と「外の関係」について、次のようにまとめている。

(4) これを、一般的には次のように言うことができるだろう。「外の関係」においては、修飾部は底の名詞の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるのに対し、「内の関係」では、修飾部は、底の名詞を「特定」するには違くないけれども、そ

の内容には関わらない、と。つまり、構文的に「内の関係」で結びついている連体修飾構造にあつては、意味的には、修飾部は底の名詞を「付加的」に修飾しているに過ぎないが、「外の関係」にあつては、それは底の名詞を「内容補足的」に修飾している、ということになる。

(寺村秀夫 1975-1978 : 197)

1.3 高橋太郎(1979)による研究

高橋太郎(1979)は、現代日本語の連体修飾に関して、動詞句と名詞の「かかわり」を取り上げて考察している。この「かかわり」というのは意味的な関係を中心としており、次の五つの種類に分けられる。

I 関係づけのかかわり

関係づけのかかわりというのは、「名詞が指し示すものごとを、それが、参加者、状況など、一定の役割でかかわっている動作や状態と関係づけるかかわり」である。

(5) で、ふたりは海外からくる返事をまった。

(高橋太郎 1979 : 348) (注²)

II 属性づけのかかわり

属性づけのかかわりというのは、「名詞のさししめすものごとに属性の面からにくづけをほどこすかかわりである。そのものごとがどんな属性を持っているかを示すのである」。例えば、

(6) 真知子には、結婚する婦人たちはみんな恐るべき冒険者に見えたとともに

(高橋太郎 1979 : 346)

Ⅲ 内容づけのかかわり

内容づけのかかわりというのは、「名詞が言語活動や心理活動、表現作品などを表していて、動詞句によって、それに内容を与えるかかわり」である。「動詞句が現実反映の内容的な側面を表し、名詞が形式的な側面を表す」。例えば、

(7) 一緒に東京へでる相談などが、二人の間にもちあがったが

(高橋太郎 1979 : 372)

Ⅳ 特殊化のかかわり

特殊化のかかわりというのは、「名詞が上位概念をしめしていて、動詞句が下位概念によって、それを特殊化するかかわり」である。例としては次のようなものがある。

(8) しかしながら、私はこうしたほめた言い方をさしひかえたい。

(高橋太郎 1979 : 346)

Ⅴ 具体化のかかわり

具体化のかかわりとは、「抽象名詞であらわされた属性が、なにを抽象したものであるかをしめすかかわり」であるという。例えば、

(9) ポリニャークがさかずきをあける速度はめだってはやくなった。

(高橋太郎 1979 : 347)

1.4 大島資生(2003)による研究

大島資生(2003)は名詞を修飾する節を「(連体)修飾節」、修飾される名詞を「主名詞」と呼んでいる。寺村秀夫(1975-1978)と同様に、現代日本語の連体修飾を、修飾節に主名詞を入れることができる「内の関係」の連体修飾と、修飾節に主名詞を入れることができない「外の関係」の連

体修飾との二つの種類に分けている。

次に、連体修飾節の意味的機能に「属性限定」と「集合限定」の二つのタイプがあると述べている。用例は以下のようなものがある。

- (10) a. この本を読んだ学生がみな深い感銘を受けた。
 b. この本を読んだ学生が多い。

(大島資生 2003 : 91)

大島資生 (2003) によれば、(10a) は「学生がこの本を読んだ。その学生がみな深い感銘を受けた」のような二つの文に言い換えられる。主名詞「学生」は「身長が高い / 低い」「貯金がある / ない」など様々な属性を持ちうる。そして「この本を読んだ」はその属性のうちの一つを取り出している。このように、「主名詞の持つ複数の属性の中から一つの属性を取り出す働き」を「属性限定」と呼ぶ。

一方、(10b) は「この本を読んだ、そういう条件に合う学生が多い」のような意を表している。ここで、「学生」が持ちうる属性のうち「この本を読んだ」というものを取り出し、その属性によって「学生」の集合の中から一部分を切り出している。このように、「主名詞の表す集合の中から一部を切り出す働き」を「集合限定」と呼ぶ。

「集合限定」は「属性限定」を基にしている。この二種の限定はいずれも複数の事物の中からものを取り出すという点で共通している。

また、大島 (2003) は連体修飾節の統語的制限について論じている。「連体修飾節を形成できるか否かについては、述語の文末形式による制限がある」。「テンスの分化を持つ要素は連体修飾節を作ることが可能である。他方、意志形 (～う / よう)、命令形 (～しろ) などテンスの分化を持たない要素は連体修飾節を作ることができない」。また、「ね」「よ」などの終助詞が連体修飾節に入ることができない。「あれ」「おや」などの感動詞も入ることができない。

2 現代日本語における連体修飾成分の意味と論理構造

現代日本語の連体修飾成分に関する分類方法は研究者によって違っている。その中で、寺村秀夫(1975-1978)は総合的かつ画期的な研究成果と言って過言ではない。本稿では寺村秀夫(1975-1978)の研究を踏まえ、現代日本語の連体修飾成分を「内の関係の連体修飾成分」と「外の関係の連体修飾成分」の二種に分けて、それぞれの意味と論理構造について考察してみたい。

2.1 内の関係の連体修飾成分の意味と論理構造

まず、例を一つ挙げよう。

(11) サンマを焼く男

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ((3a) の再掲)

寺村秀夫(1975-1978)によれば、「内の関係」とは、連体修飾成分と主名詞との結合が、動詞と名詞との間の格関係の力によって保持される構造であると考えられる。(11)の例は「男がサンマを焼く」のように、主名詞を連体修飾成分の内側に移動することが可能である。つまり、主名詞である「男」はそれに格助詞「が」を付けて連体修飾成分にある動詞「焼く」と結びつけることができ、連体修飾成分と主名詞の間に「動作主格」の格関係を持っているがわかる。

そこで、従来の形態素、単語などのような概念を離れて、その意味に注目し、形式言語の研究の技法である命題論理^(注3)と述語論理^(注4)というメタ言語を用いて、「ものの結合(野矢茂樹訳 2003:14)」^(注5)の原理をベースに、用例の意味を論理式で表記し、その論理式の成立とその表す意味を詳しく説明しながら、その格関係を明示してみよう。

連体修飾成分の「サンマを焼く」と主名詞「男」が意味的に結びつく動機を示すために、深く考えなければいけない。まず、この表現は「あるもの」である「男」が「ある事態」つまり「誰かがサンマを焼く」のうちに

現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない（野矢茂樹訳 2003 : 14）ので、次の (11-①) ^(注6) になる。

(11-①) 焼ク' (u, サンマ)
 ~ガ' ~ヲ

この論理式は「u がサンマを焼く」と読む。この論理式の中で、「男」を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので (11-①) は次の (11-②) になる。

(11-②) \wedge 焼ク' (u, サンマ)

そして、この内包が、「男」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

(11-③) アル' $\{\wedge$ 焼ク' (u, サンマ), 男}
 ~ガ' ~ニ

ここでは「 \wedge 焼ク' (u, サンマ)」という内包が「男」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。“ \vee ” は外延演算子で、外延化を示す。

(11-④) アル' $\{\vee \wedge$ 焼ク' (u, サンマ), 男} & '=' (男, un)
 ~ガ' ~ニ ヒソイ ~ガ' ~ニ

これが (11) の論理式になる。 u_n ^(注7) の添え字の n は u_n が定項である

ことを示す。この論理式は「焼ク’ (u, サンマ)」が「uがサンマを焼く」という意味を表し、論理式全体が「uがサンマを焼くという内包が「男」という個体にあり外延化する、かつ、「男」がu_nに等しい」という意味を表している。

この論理式により、「焼ク’ (u, サンマ)」は「u」と「焼く」の格役割を記述し、そして、連鎖関係によって、主名詞の「男」が連体修飾成分にある動詞「焼く」と結びついて「動作主格」を表し、命題を作ることが明示された。

「内の関係の連体修飾成分」について、もう一つの例を見られたい。

(12) 君がその時聞いた足音

(寺村秀夫 1975-1978 : 167)

議論を集中するために、「その時」を省略し、「君が聞いた足音」を対象として考察することにする。(12)の例は「君が足音を聞いた」のように、主名詞を連体修飾成分の内側に移すことができる。つまり、主名詞の「足音」はそれに格助詞「を」を付けて連体修飾成分にある動詞「聞く」と結びつけることができ、連体修飾成分と主名詞の間に「対象格」の格関係を見出せる。

次に、論理式を用いて、その格関係を緊密に表記してみよう。まず、「あるもの」である「足音」が「ある事態」つまり「君が何かを聞いた」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていない（野矢茂樹訳 2003 : 14）ので、次の(12-①)になる。

(12-①) 聞く’ (君, u) &スル’ {聞く’ (君, u), た}
 〜が 〜ヲ 〜が’ [完了]ヲ

この論理式は「聞く’ (君, u)」が「君が u を聞く」の意を表し、「スル’ {聞

く' (君, u), た }」が「君が u を聞くことが [完了] をする」の意を表している。この論理式の中で、「足音」は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 {w₁, w₂, …, w_n} のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので(12-①)は次の (12-②) になる。

$$(12-②) \wedge [\text{聞く}' (君, u) \&\text{スル}' \{ \text{聞く}' (君, u), \text{た} \}]$$

そして、この内包が、「足音」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

$$(12-③) \text{アル}' [\wedge [\text{聞く}' (君, u) \&\text{スル}' \{ \text{聞く}' (君, u), \text{た} \}], \text{足音}]$$

～が^o ～ニ

ここでは「 \wedge [聞く' (君, u) &スル' {聞く' (君, u), た}]」という内包が「足音」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

$$(12-④) \text{アル}' [\vee \wedge [\text{聞く}' (君, u) \&\text{スル}' \{ \text{聞く}' (君, u), \text{た} \}], \text{足音}]$$

～が^o ～ニ

$$\&=' (\text{足音}, u_n)$$

$$\text{ヒトシイ} \sim\text{が} \sim\text{ニ}$$

これが (12) の論理式になる。u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式全体は「君が u を聞く、かつ、君が u を聞くことが [完了] をするという内包が「足音」という個体にあり外延化する、かつ、「足音」が u_n に等しい」と読める。

この論理式の中の「聞く' (君, u)」という命題は「u」の格役割を述べ

ており、連鎖関係によって、主名詞「足音」が連体修飾成分の動詞「聞く」と結びついて「対象格」を表していることが明示されている。

念のために、もう一つ例を挙げて分析しておきたい。

(13) 噴水がある広場 (大島資生 2003 : 95)

(13) は「噴水が広場にある」のように、連体修飾成分に主名詞「広場」を入れることができ、意味的に主名詞が連体修飾成分の「内」にある。主名詞「広場」は格助詞「に」を付けて連体修飾成分にある動詞「ある」と結びつけることができ、連体修飾成分と主名詞の間に「場所格」の格関係を見出せる。

次に、論理式を用いて表記しながら、その格関係を明示していこう。まず、「あるもの」である「広場」が「ある事態」つまり「噴水がどこかにある」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない(野矢茂樹訳 2003:14) ので、次の (13-①) になる。

(13-①) アル' (噴水, u)
 ~が ~ニ

この論理式は「噴水が u にある」と読む。この論理式の中で、「広場」が変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので (13-①) は次の (13-②) になる。

(13-②) \wedge アル' (噴水, u)

そして、この内包が、「広場」という個体に存在しているので次の (13-③) が書ける。

(13-③) アル' {[^]アル' (噴水, u), 広場}
 ~が[°] ~ニ

ここでは「[^]アル' (噴水, u)」という内包が「広場」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

(13-④) アル' {[^]アル' (噴水, u), 広場} &= ' (広場, u_n)
 ~が[°] ~ニ ヒトシ ~が[°] ~ニ

これが (13) の論理式になる。u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式全体は「噴水が u にあるという内包が「広場」という個体にあり外延化する、かつ、「広場」が u_n に等しい」と読める。

この論理式の中の「アル' (噴水, u)」という命題は「u」の格役割を明示している。また、連鎖関係によって、主名詞「広場」が連体修飾成分の動詞「ある」と結びついて「場所格」を表していることが明示されている。

以上のように、(11) から (13) の例はすべて、「内の関係の連体修飾成分」の例であり、主名詞の名詞が「を」「が」「に」「で」などの格助詞を付けて、連体修飾成分の内に入れて一定の格関係を構成できることがわかる。

2.2 外の関係の連体修飾成分の意味と論理構造

次に、「外の関係の連体修飾成分」について論じることにした。まず次のような例がある。

(14) サンマを焼く 匂い

(寺村秀夫 1975-1978 : 167) ((3b) の再掲)

寺村秀夫（1975-1978）によると、(14) の例は主名詞「匂い」にどのような格助詞をつけても連体修飾成分のどこにも納めることができない。即ち、この連体修飾構造にあっては、連体修飾成分と主名詞は、一つの文の構成要素が修飾関係に転じたとは言えない。言い換えれば、主名詞は連体修飾成分のどこかから取り出されて主名詞の位置に坐ったものであるとは言えず、どこか外から、連体修飾成分の外から来たものだとしか言えない。このような連体修飾成分を「外の関係の連体修飾成分」と呼んでいる。

(14) の文は、「(ある) 匂いがする」と「サンマを焼く」という二つの叙述内容を含んでいるが、この二つの叙述内容を結びつける共通の名詞、つまり結び目がない。「サンマを焼く」と「匂い」を結びつけることができるのは、「外の関係」においてである。連体修飾成分は主名詞の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるからである。そうすると、(14) の例は「その匂いは、サンマを焼くものである」のように転換できる。

次に、「ものの結合（野矢茂樹訳 2003 : 14）」の原理をベースに、(14) の例の意味を論理式で表記し、例の表す意味を詳しく説明してみよう。

まず、この表現は「あるもの」である「匂い」が「ある事態」つまり「サンマを焼くということが何かの内容である」のうちに現れるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。「匂い」が生起しうる「事態の可能性（野矢茂樹訳 2003 : 14）」は次の (14-①) になる。

$$(14-①) \text{ 有スル' (u, [内容]) \&アル' \{ [内容], 焼ク' (\phi, \text{サンマ}) \} } \\ \sim\text{ガ} \quad \sim\text{ヲ} \qquad \qquad \qquad \sim\text{ガ} \qquad \sim\text{トイウモノデ}$$

この論理式は「有スル' (u, [内容])」が「u が [内容] を有する」という意味を表し、「アル' {[内容], 焼ク' (\phi, サンマ)}」が「その [内容] が \phi がサンマを焼くというものである」の意味を表している。

ここでの「内容」は論理形式を表す。「論理形式」とは『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳）における定義に基づくものである。論理形式は「ある対象の論理形式とはその対象がどのような事態のうちに現れるか、その論理的可能性の形式のことである」と説明されている（ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003 : 184）。

この論理式の中で、「匂い」を変数として捉えているので、「u」で表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ のどの要素にも存在しうる。つまり、内包であるので (14-①) は次の (14-②) になる。

$$(14-②) \wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \ \&\text{アル}' \{[\text{内容}], \text{焼ク}' (\phi, \text{サンマ}) \}]$$

そして、この内包が、「匂い」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

$$(14-③) \text{アル}' [\wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \ \&\text{アル}' \{[\text{内容}], \text{焼ク}' (\phi, \text{サンマ}) \}],$$

～カ[°]

匂い]

～ニ

ここでは「 $\wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \ \&\text{アル}' \{[\text{内容}], \text{焼ク}' (\phi, \text{サンマ}) \}]$ 」という内包が「匂い」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

$$(14-④) \text{アル}' [\vee \wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \ \&\text{アル}' \{[\text{内容}], \text{焼ク}' (\phi, \text{サンマ}) \}],$$

～カ[°]

匂い] &= ' (匂い, u_n)

～ニ ヒトシイ ～カ[°] ～ニ

これが (14) の論理式になる。 u_n の添え字の n は u_n が定項であることを示す。この論理式は「 u が論理形式 [内容] を有する、かつ、その論理形式 [内容] が ϕ がサンマを焼くというものであるという内包が「匂い」という個体にあり外延化する、かつ、「匂い」が u_n に等しい」と読める。

この論理式によって、主名詞「匂い」は連体修飾成分「サンマを焼く」の内側に入れることができず、連体修飾成分「サンマを焼く」が主名詞「匂い」の論理形式 [内容] を表すことが明示された。

また、似た例を二つ追加しておきたい。

(15) 清少納言と紫式部が会った事実

(16) 宮女たちが布を洗っていた姿

(寺村秀夫 1975-1978 : 199)

(15) と (16) も「外の関係の連体修飾成分」に属し、さきの例と同様に解釈することが可能である。まず、(15) の例の論理式を記述してみよう。

(15) では、主名詞「事実」は格助詞を付けて、連体修飾成分である「清少納言と紫式部が会った」の内側に移すことができない。連体修飾成分にある動詞が主名詞と格関係を持たず、連体修飾成分が主名詞の内容を表している。(15) の例は「その事実は、清少納言と紫式部が会ったということである」のように転換できる。

次に、形式意味論の演繹的な手法を用いて、(15) の例の意味を論理式で表記しておこう。論述の中心は連体修飾構造であるために、煩雑になるのを避けて、テンスやアスペクトなどは説明しないことにする。

まず、「あるもの」である「事実」が「ある事態」つまり「清少納言と紫式部が会ったという内容」であるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなくてはならない。「事実」が生起しうる「事態の可能性」(野矢茂樹訳 2003 : 14) は次の (15-①) になる。

$$(15-①) \text{ 有スル}' (u, [\text{内容}]) \& \text{アル}' \{[\text{内容}], \text{会ウ}' (\text{清少納言}, \text{紫式部}) \}$$

$$\sim \text{ガ} \quad \sim \text{ヲ} \qquad \sim \text{ガ} \qquad \sim \text{トイウコトデ}$$

この論理式は「有スル' (u, [内容])」が「u が 論理形式 [内容] を有する」という意味を表し、「アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}」が「その論理形式 [内容] が清少納言と紫式部が会うというものである」の意味を表している。

この論理式の中で、「事実」は変項になるので、「u」を用いて表記する。また、この論理式は「事態の可能性」を表わすので、u の領域 $\{w_1, w_2, \dots, w_n\}$ である可能世界のどれにも存在する。つまり、内包であるので (15-①) は次の (15-②) になる。

$$(15-②) \wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \& \text{アル}' \{[\text{内容}], \text{会ウ}' (\text{清少納言}, \text{紫式部}) \}]$$

そして、この内包が、「事実」という個体に存在しているので次の論理式が書ける。

$$(15-③) \text{アル}' [\wedge [\text{有スル}' (u, [\text{内容}]) \& \text{アル}' \{[\text{内容}], \text{会ウ}' (\text{清少納言}, \text{紫式部}) \}], \text{事実}]$$

$$\sim \text{ニ}$$

ここでは「 \wedge [有スル' (u, [内容]) & アル' {[内容], 会ウ' (清少納言, 紫式部)}]」という内包が「事実」という個体、つまり外延と結びつくことになり、内包の可能世界の要素が指定されて外延化する。その結果、論理式は次のようになる。

以上のように、(14) から (16) の例はすべて「外の関係の連体修飾成分」の例であり、主名詞が格を持たず、連体修飾成分は主名詞の内容を表すことがわかる。

3 結び

本稿では、形式意味論の分析方法を現代日本語の連体修飾成分に適用し、現代日本語の連体修飾成分の意味と論理構造を考察した。

寺村秀夫 (1975-1978) の論点に基づいて、現代日本語の連体修飾成分を「内の関係の連体修飾成分」と「外の関係の連体修飾成分」に分けて、各用例を論理式で表記し、それぞれの論理構造を明示的に示した。「内の関係の連体修飾成分」は、主名詞が連鎖関係によって、連体修飾成分と一つの命題を構成できるので、連体修飾成分と主名詞の間に一定の格関係を持つ。また、「外の関係の連体修飾成分」は、主名詞が連体修飾成分と一つの命題を構成できず、連体修飾成分と主名詞の間に格関係は存在しない、ということ論理式によって明示した。

形式意味論の分析方法は、日本語の文の構造、意味及び文成分の間の結びつきを明示しているので、日本語の研究や教育に役立つことを期待している。

注釈

1. 引用のページ番号は寺村秀夫 (1992) によるものである。以下同様。
2. 引用のページ番号は高橋太郎 (1994) によるものである。以下同様。
3. 命題論理 (Propositional logic) は、形式意味論で用いられる基本的な方法論の一つであり、命題と命題の論理的関係を扱う。文と文の間の論理関係は、連言、選言、含意、同値、否定などの結合子によって決定される。これらの表記には、「&」、「∨」、「→」、「⇔」、「¬」などの記号が使われる。
4. 述語論理 (Predicate logic) は、命題の内容 (文の内部構造) を意味論的に分析する論理言語である。基本的には命題を述語 (predicate)

と述語の要求する項 (argument) の組み合わせとして記述する。項の数により、一項述語、二項述語、三項述語のように呼ぶ。

5. 『論理哲学論考』(ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003 : 13 - 14) はものの結合について次のような注釈を与えている。
- 二. 成立している事柄、すなわち事実とは諸事態の成立である。
 - 二. ○一 事態とは諸対象 (もの) の結合である。
 - 二. ○一一 事態の構成要素になりうることはものにとって本質的である。
 - 二. ○一二 論理においては何一つ偶然ではない。あるものがある事態のうちに見えるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて先取りされていなければならない。

(野矢茂樹訳 2003 : 13 - 14)

6. 本稿の論理式における括弧は“()”、“{ }”、“[]”、“【 】”の四つを使う。そして“()”が最も作用域 (scope) が狭く、“【 】”が最も作用域が広いとする。すなわち下記の (a) のように考える。
- (a) () < { } < [] < 【 】
- (a) は“()”は“{ }”より作用域が狭く、“{ }”は “[]”より作用域が狭く、“[]”は【 】”より作用域が狭いことを表している。
7. 「=」(男, u_n)」の中の「 u_n 」の下付きの「 n 」はもともと可能世界の「 w_n 」を表すので「 w_n 」と書いたほうがよいが、入力 of 便宜をはかるために、「 w 」を省略し、「 n 」だけを添え字として使うことにする。本稿のほかの論理式も同様に扱う。

参考文献

- 井上和子 1976. 『変形文法と日本語』。東京：大修館書店。
- ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003. 『論理哲学論考』。東京：岩波書店。
- 大島資生 2003. 「連体修飾の構造」、『朝倉日本語講座 5 文法 I』。東京：朝倉書店。
- 2010. 『日本語連体修飾節構造の研究』。東京：ひつじ書房。

- 奥津敬一郎 1974. 『生成日本文法論』。東京：大修館書店。
- 加藤重広 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』。東京：ひつじ書房。
- 金京愛 2009. 『日本語の「あいまい文」の構造について』。南京農業大学
修士論文。
- 金水敏 1986. 「連体修飾成分の機能」、『松村明教授古稀記念国語研究論集』。
東京：明治書院
- 草薙裕 1991. 『日本語はおもしろい—考え方・教え方・学び方』。東京：
講談社。
- 杉本孝司 1998. 『意味論 1—形式意味論—』。東京：くろしお出版。
- 高橋太郎 1979. 「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」、『言
語の研究』言語学研究会編。(高橋太郎 (1994) に再録)
- 1994. 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』。東京：
むぎ書房。
- 寺村秀夫 1975-1978. 「連体修飾のシンタクスと意味 (1) - (4)」、『日本語・
日本文化』(4-7)，大阪外国語大学留学生別科。(寺村秀夫 (1992) に
再録)
- 1991. 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版。
- 1992. 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』東京：くろしお出版。
- 西山佑司 2003a. 「名詞句の諸相」、『朝倉日本語講座 5 文法 I』。東京：朝
倉書店。
- 2003b. 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指
示的名詞句』。東京：ひつじ書房。
- 日本語教育学会編 2005. 『日本語教育事典 (新版)』。東京：大修館書店。
- 日本語文法学会編 2014. 『日本語文法事典』。東京：大修館書店。
- 松村文芳 2017、2018. 講義ノート：神奈川大学大学院中国語学特殊研究Ⅲ
a/b。
- 2017. 『現代中国語の意味論序説』。東京：ひつじ書房。
- 森田良行 2002. 『日本語文法の発想』。東京：ひつじ書房。
- 南不二男 1974. 『現代日本語の構造』。東京：大修館書店。